



Title	現代スウェーデン語の擬似再帰代名詞について
Author(s)	當野, 能之
Citation	IDUN. 2001, 14, p. 151-168
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95688
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代スウェーデン語の擬似再帰代名詞について

當野 能之

1. 序

Lindberg (1994 : 218-19) は、次の (1a-5a) の再帰代名詞を含んだ動詞句の一群をまだ十分に研究されていない分野の一部として挙げている。¹⁾

- 1) a. längta sig sjuk 〈恋い焦がれて病気になる〉
long RM sick
b.*längta sig
- 2) a. växa sig stor 〈成長して大きくなる〉
grow RM big
b.*växa sig
- 3) a. skrika sig hes 〈叫んで声がかれる〉
shout RM hoarse
b.*skrika sig
- 4) a. supa sig fördärvad 〈酒を飲みすぎて体を壊す〉
drink RM ruined
b.*supa sig
- 5) a. köpa sig fri 〈自分の身を買って自由になる〉
buy RM free
b.*köpa sig

これらの動詞句は (1b-5b) から分かるように、sjuk 〈sick〉, stor 〈big〉のような補語を義務的に必要としている点で一般的な再帰代名詞の用法とは異なる。また (1-3) の例は、目的語を取ることのできない自動詞が再帰代名詞を要求しているという点でも特殊である。Lindberg (1994 : 219) は、以上のような再帰代名詞を含んだ動詞句は、例えば (3) の場合、次の (6) のように så att 〈so that〉の構文 (以下、[så att 構文]と呼ぶ) で言い換えたものとほぼ同義であるとしている。

- 6) Han skrek så att han blev hes.
he shouted so that he became hoarse 〈彼は叫んで声がかれた。〉

Lindberg は例文を挙げていないので、まずは辞書等からの例文を見てみよう。²⁾

- 7) Pojken växte sig stor och stark. (SH: 864)
boy.DEF grew RM big and strong 〈その少年は成長して大きくなった。〉

- 8) 5000 rockfantaster skrek sig hesa. (SO: 463)
5000 rock-fans shouted RM hoarse
〈5000人のロックファンは叫んで声がかれた。〉
- 9) Trälen kunde också köpa sig fri genom arbete. (SS: 69)
slave.DEF could also buy RM free through work
〈奴隷は労働を通して自分の身を買ひ、自由になることもできた。〉

以上のような構文は一般的に「結果構文」(resultative construction) と呼ばれ、また結果構文にのみ現れる再帰代名詞は「擬似再帰代名詞」(fake reflexive) と呼ばれ、英語を中心に研究が進んでいる。³⁾ しかし、スウェーデン語の結果構文および擬似再帰代名詞に関する論考はまだ無いものと思われる。⁴⁾ 本稿ではスウェーデン語の擬似再帰代名詞の分布に関して論じていく。以下では、まず2章でスウェーデン語の結果構文全般について概観し、3章で本稿の目的である、結果構文と再帰代名詞の関係に関して論じる。また、結果構文の一部としての移動を表す構文で、擬似再帰代名詞が出現することをみる。4章で結論を述べる。

2. 現代スウェーデン語の結果構文

2.1. 結果構文の定義

まず最初に結果構文を定義したい。ここでは (10a) にみられるように動詞と結果をあらわす句（以下ではこれを結果述語 (resultative phrase) と呼ぶ）を持つものを結果構文と定義する。ある構文が結果構文であるかどうかは Lindberg (1994: 219) に従い、次に見るように、結果を表す [så att 構文] で言い換えられるかどうかで判断することができる。

- 10) a. Hon kokade köttet mörkt.
she boiled meat.DEF tender 〈彼女は肉をゆでて柔らかくした。〉
- b. Hon kokade köttet så att det blev mörkt.
she boiled meat.DEF so that it became tender

このように定義した場合、次の (11a), (12a) のように見かけ上は同じ構造を持つ文でも、[så att 構文] で言い換えができるかどうかで結果構文であるかどうかを判断することができる。

- 11) a. Hon klädde av sig naken.
she undressed RM naked 〈彼女は服を脱いで裸になった。〉
- b. Hon klädde av sig så att hon blev naken.
she undressed RM so that she became naked
- 12) a. Kungen åt middagen naken.
king.DEF ate dinner.DEF naked 〈王様は裸で夕食をとった。〉

b.#Kungen åt middagen så att han blev naken.

king.DEF ate dinner.DEF so that he became naked

(11a) の *naken* (naked) は「服を脱いだ結果、彼が裸になる」という結果状態を表しているが、(12a)は「食事をした結果、王様が裸になる」ということではなく、「王様が裸で食事をした」という状態描写 (depictive) であり、区別しなければならない。上で見たように、このような表層的な差を [så att 構文] で明示することができる。ただし [så att 構文] による定義には問題点がある。統語的・意味的な観点から見た場合、結果述語の文法範疇としては、以下の例文の下線部に見られるように、形容詞 = (13a), 前置詞句 = (14a), 不変化詞 = (15a) が認められる。しかし、(14b), (15b) を見てもわかるように、結果述語が前置詞句あるいは不変化詞の場合、så att 構文による言い換えができない。これはそもそも (14c), (15c) からわかるように、前置詞句そして不変化詞が一般的に bli (become) を述語動詞として選択した文を作れないことに原因がある。

13) a. Han arbetade sig trött.

he worked RM tired (彼は働いて疲れた。)

b. Han arbetade så att han blev trött.

he worked so that he became tired

14) a. Han arbetade sig till döds.

he worked RM to death (彼は働き過ぎて死んだ。)

b.*Han arbetade så att han blev till döds.

he worked so that he became to death

c.*Han blev till döds.

he became to death

15) a. Han arbetade ihjäl sig.

he worked to-death RM (彼は働き過ぎて死んだ。)

b.*Han arbetade så att han blev ihjäl.

he worked so that he became to-death

c.*Han blev ihjäl.

he became to-death

ただし、結果述語が前置詞句あるいは不変化詞の場合でも、次のように別の動詞で言い換えが可能な場合もある。

16) a. Han cyklade sönder framhjulet. (TE: 47)

he cycled broken front-wheel.DEF

b. Han cyklade så att framhjulet gick sönder.

he cycled so that front-wheel.DEF went broken.

(彼は自転車に乗ってその前輪を壊してしまった。)

(16) では不変化詞 *sönder* (broken) は *gå* (go) という動詞を選択している。どのような結果述語がどのような動詞をとるのかは、それ自体興味のある問題ではあるが、本稿の範囲を超える問題であるので、ここでは問題としないことにする。

ここまで見てきたように、[*så att* 構文] は形容詞が結果述語の時は有効であるが、それ以外の時は結果構文かどうかのテストにはならない。本稿は、結果構文自体を問題にしているわけではないので、スウェーデン語の結果構文の厳密な定義はまた別の機会に取り上げることとする。ここでは最初にも述べたように、動詞と結果を表す句を持つものを結果構文と定義する。

2.2. 結果述語の文法範疇

2.1. でも少し触れたように、結果述語の文法範疇としては、形容詞のほかに、不変化詞と前置詞句が認められる。ただし次の例を見てもわかるように、目的語と結果述語の相対的な語順が、形容詞、前置詞句 (= (17a)) と不変化詞 (= (17b)) で異なる。

17) a. 動詞 + 目的語 + 形容詞 / 前置詞句

Han arbetade sig trött / till döds

he worked RM tired / to death (彼は働いて疲れた/働き過ぎて死んだ。)

b. 動詞 + 不変化詞 + 目的語

Han arbetade ihjäl sig

he worked to-death RM (彼は働き過ぎて死んだ。)

スウェーデン語の不変化詞は英語など他のゲルマン語と違い、目的語が代名詞か普通名詞かなどによって、相対的な語順の変化を引き起こさず(例外はあるにせよ)、一般的に動詞の直後に位置する。つまり、不変化詞移動 (particle movement) あるいは目的語移動 (object shift) を起こさない。このような語順の違いが結果構文にどのような影響を及ぼすのか、あるいは語順の違うものをそもそも同じ構文として扱うべきのかなど様々な問題があるが、この点に関してはまた別の機会に取り上げることにはしたい。

以上をふまえた上で、結果述語に関して、*slå* (hit) という動詞を例にとり、それと結びつく代表的な結果述語をカテゴリ一別々に下に挙げておく。

18) 形容詞

slå någon gul och blå / blodig / fördärvad / medvetslös

hit someone yellow and blue / bloody / ruined / unconscious

(人を殴ってあざだらけにする/血だらけにする/ふらふらにする/気絶させる)

19) 不変化詞

a. slå sönder något

hit broken something 〈物を殴り壊す（あるいはただ単に「壊す」の意）〉

b. slå ihjäl någon

hit to-death someone 〈人を殴り殺す〉

20) 前置詞句

a. slå något i bitar / delar / kras / stycken

hit something to pieces 〈物をたたいて粉々にする〉

b. slå någon till döds

hit someone to death 〈人を殴り殺す〉

3. 結果構文と擬似再帰代名詞

結果構文の一般的特徴と擬似再帰代名詞の関係について見ていく。

3.1. 結果構文の一般的特徴

次の文を見てみよう。

21) a. Han målade stolen grön.

he painted chair.DEF green 〈彼はその椅子を緑色に塗った。〉

b. *Han målade stolen trött.

he painted chair.DEF tired 〈(意図した意味) 彼は椅子を塗って疲れた。〉

(21a) は「彼が椅子に色を塗り、その結果、椅子が緑色になった。」ということを表している。つまり結果述語 *grön* 〈green〉は直接目的語 *stolen* 〈chair.DEF〉の結果状態を叙述している。一方、(21b) は「彼が椅子に色を塗って、その結果、彼が疲れてしまった。」ということ在意図した文であるが、この場合は非文になる。つまり結果述語 *trött* 〈tired〉は主語 *han* 〈he〉の結果状態を叙述することはできない。以上、(21) から分かることは「他動詞の結果構文において、結果述語は直接目的語の結果状態を叙述することはできるが、主語の結果状態を叙述することはできない。」ということである。他動詞の結果構文に見られるこのような制約は一般的に、英語などの研究で「直接目的語制約」(direct object restriction) と呼ばれている。

一方、描写述語はどうであろうか？

22) a. Kungen åt fisken naken.

king.DEF ate fish.DEF naked 〈王様は裸で魚を食べた。〉

b. Kungen åt fisken rå.

king.DEF ate fish.DEF raw 〈王様は魚を生で食べた。〉

(22a) は「王様が裸の状態で魚を食べた」という意味で、描写述語 *naken* 〈naked〉

は主語 *kungen* <king.DEF> の状態を叙述している。一方, (22b) は「王様が魚を生状態で食べた」という意味で, 描写述語 *rå* <raw> は目的語 *fisken* <fish.DEF> の状態を叙述している。以上から, 描写述語は, 結果述語とは違い, 主語も目的語も修飾することができる (つまり直接目的語制約は働いていない) ということがわかる。この点からも結果述語と描写述語は区別されなければならない。ところで (21a) に対応する受身文である (23) では, 結果述語が主語の結果状態を叙述している。このことから受身文の主語は他動詞の直接目的語と同じ振舞いをしていることが分かる。

- 23) *Stolen* *målades* *grön*.
chair.DEF painted.PASS green <その椅子は緑色に塗られた。>

3.2. 他動詞の結果構文

結果構文と擬似再帰代名詞の議論に入る前に, 他動詞による一般的な結果構文について大まかな動詞分類ごとに見ていくことにする。

3.2.1. 状態変化動詞 (語彙的使役動詞)

状態変化動詞 (語彙的使役動詞) は動詞自体に結果状態までの意味を含んでいるので, 結果述語をつけた場合は結果状態をさらに詳しく述べることになる。

影山 (1996: 214 - 215) の分類に従い, いくつかの動詞の意味分類ごとに見ていく。

「壊す・つぶす・切る」など

- 24) *Hon skar brödet i skivor*.
she cut bread.DEF in slices <彼女はそのパンをうす切りにした。>

- 25) a. *bryta något i småbitar*
break something in little-pieces <折ってこなごなにする>

b. *klippa itu något*
cut in-two something <二つに切る>

c. *dela ett äpple i fyra delar*
divide an apple in four pieces <りんごを4つに分ける>

「曲げる・折る」など

- 26) *Han vek en näsduk i fyra delar*.
he folded a handkerchief in four pieces <彼はハンカチを4つに折った。>

- 27) *böja ett rör till U-form*
bend a pipe to U-form <パイプをU字に曲げる>

「染める・塗る」など

- 28) Hon färgade kjolen blå.
she dyed skirt.DEF blue 〈彼女はスカートを青く染めた。〉
- 29) måla väggen röd
paint wall.DEF red 〈壁を赤く塗る〉

「その他様々な状態変化」

- 30) Tjuvarna sprängde sönder kassaskåpet
thieves.DEF bursted broken safe.DEF
〈その泥棒たちは金庫を爆破して壊した。〉
- 31) a. smälta guld till tackor
melt gold to billets 〈金を溶かして延べ棒にする〉
- b. stänga igen dörren
close shut door.DEF 〈ドアを閉める〉
- c. öka något till det dubbla
increase something to the double 〈2倍にする〉

ただしすべての状態変化動詞が結果構文を形成できるわけではない。たとえば döda 〈kill〉のように、結果状態が語彙的に指定されてしまっているような語彙的使役動詞は結果述語をつけることはできない。

- 32) *Han dödade henne till döds.
he killed her to death. 〈彼は彼女を殺した。〉

3.2.2. 接触・打撃動詞など

接触・打撃動詞に代表されるような、対象に対して何らかの働きかけを行う動詞も結果構文を形成する。打撃動詞が状態変化動詞と違う点は、対象が変化することまでは含意しないということである。したがって、状態変化動詞においては結果述語は結果状態を詳しく述べる機能を持っていたが、打撃動詞では結果述語は対象の状態変化を付け加える働きをする。

打撃動詞に関しても例を見ていこう。(ただし, slå 〈hit〉に関しては, 例文(18)–(20)を参照.)

- 33) Pojken trampade ihjäl musen.
boy.DEF tramped to-death mouse.DEF 〈その少年はねずみを踏み殺した。〉
- 34) a. sparka upp / igen dörren
kick open / shut door.DEF 〈ドアを蹴って開ける/閉める〉
- b. bita / riva / skjuta / sparka/ krama / trampa ihjäl någon
bite / scratch / shoot / kick / squeeze/ tramp to-death a person
〈噛み / 裂き / 撃ち / 蹴り / 絞め / 踏み殺す〉

対象に対する働きかけがまったくない動詞は、次の (35) に見るように結果構文を作ることにはできない。

35) *Kungen liknade mannen berömd.

king.DEF resembled man.DEF famous

〈(意図した意味) 王様はその男に似ていたのもので、その男は有名になった。〉

また、たとえ自動詞でも働きかけが感じられる場合は、結果構文を形成することができる。

36) a. Hon dansade sönder sina nya skor. (TE: 46)

she danced broken her new shoes

〈彼女は踊って、新しい靴をだめにしてしまった。〉

b. *Hon dansade sina nya skor.

she danced her new shoes

37) a. Han lyckades inte att prata omkull mig. (SH: 573)

he succeeded not to talk down me

〈彼は私を(議論で)打ち負かすことはできなかった。〉

b. *Han lyckades inte att prata mig.

he succeeded not to talk me

38) a. Suggan hade legat ihjäl en av smågrisarna. (SH: 433)

sow.DEF had lain to-death one of little-pigs.DEF

〈雌豚は子豚の上に横になってその1匹を殺してしまった。〉

b. *Suggan hade legat en av smågrisarna.

sow.DEF had lain one of little-pigs.DEF

3.3. 結果構文と擬似再帰代名詞

3.2. では主に他動詞の結果構文と、働きかけが感じられるような自動詞でも結果構文を形成できることを見てきた。ここでは、(主に) 自動詞の結果構文における擬似再帰代名詞との関係について見ていく。ここでの自動詞の結果構文とは (36) – (38) でみたような、主語の対象に対する働きかけとその結果起きる対象の変化でなく、主語自身の変化を表すようなものである。下の例を見てみよう。

39) a. *Han dansade trött.

he danced tired

b. Han dansade sig trött.

he danced RM tired 〈彼は踊って疲れた。〉

c. *Han dansade sig .

he danced RM

- 40) a. Stenen sprack i två nästan jämnstora delar.
stone.DEF cracked in two almost even-big parts
b.*Stenen sprack sig i två nästan jämnstora delar.
stone.DEF cracked RM in two almost even-big parts
〈その石は2つのほとんど同じ大きさに割れた。〉

(39b) では主語が踊った結果、疲れたという、主語の結果状態を表している。一方(40a)も主語である石が割れた結果、2つになったという結果状態を表している。(39b)と(40a)の違いは、(39b)が再帰代名詞を必要としているの対し、(40a)では再帰代名詞が現れないという点である。第1章でも述べたように、このような再帰代名詞は擬似再帰代名詞 (fake reflexive) と呼ばれている。以下ではどのような場合に擬似再帰代名詞が現れるのか(あるいは、現れないのか)について見ていく。

3.3.1. 結果構文における擬似再帰代名詞

まずは、擬似再帰代名詞が必要な場合を見てみよう。

- 41) a. Han arbetade sig trött.
he worked RM tired 〈彼は働いて疲れた。〉
b. arbeta / dansa / gå / springa sig trött
work / dance / walk / run RM tired
〈働いて/踊って/歩いて/走って疲れる〉
- 42) a. Publiken skrek sig hes. (LO: 126)
audience.DEF shout RM hoarse 〈聴衆は叫んで喉が枯れた〉
b. skrika / sjunga / tala sig hes.
shout / sing / talk RM hoarse 〈笑って/歌って/喋って声がかれる〉
- 43) a. Publiken skrattade nästan ihjäl sig.
audience.DEF laughed almost to-death RM
〈聴衆は笑い過ぎて死にそうになった〉
b. arbeta / äta / supa / skratta ihjäl sig
work / eat / drink / laugh to-death RM
〈働き過ぎで/食べ過ぎで/飲み過ぎで/笑い過ぎで死ぬ〉
- 44) a. Hon grät sig till sömns.
she cried RM to sleep 〈彼女は泣いているうちに寝てしまった。〉
b. läsa / gråta sig till sömns
read /cry RM to sleep
〈本を読んでいるうちに/泣いているうちに眠ってしまう〉

- 45) a. arbeta / gråta / sörja / äta sig till döds
 work / cry / grieve / eat RM to death
 〈働き過ぎで/泣いて/悲しんで/食べ過ぎで死ぬ〉
- 46) a. Hon går och sörjer sig rent fördärvad.(SH: 781)
 she go and grieve RM completely ruined.
 〈彼女は悲しんで完全に完全に体調を崩している。〉
- b. arbeta / supa / sörja sig fördärvad
 work / drink /grieve RM ruined
 〈働き過ぎて/お酒を飲み過ぎて/悲しんで体を壊す〉
- 47) dansa sig varm
 dance RM warm 〈踊って暑くなる。〉
- 48) sova / banta sig frisk
 sleep / slim RM healthy 〈寝て/ダイエットをして健康になる〉

以上の例からわかるのは、変化を含意しない動詞が結果構文に現れる場合は擬似再帰代名詞が必要であることがわかる。それに対し、次の例からもわかるように、変化を含意する動詞は擬似再帰代名詞を必要としない。

- 49) Huden har spruckit sönder.
 skin.DEF has cracked broken 〈肌がひび割れた。〉

50) Männen frös ihjäl vid Sydpolen.
 men.DEF freezed to-death at south-pole.DEF 〈その男達は南極で凍死した。〉

変化を含意する動詞で擬似再帰代名詞を取るものとしては(2), (7)で取り上げた växa 〈grow〉があるが、現時点では、この1例しか見当たらず、例外であると考えられる。

- 51) Pojken växte sig stor och stark. (SH: 864)
 boy.DEF grew RM big and strong 〈その少年は成長して、大きく強くなった。〉

3.3.2. 移動構文における擬似再帰代名詞

現代スウェーデン語では、移動をあらわす場合にも、次に見るように擬似再帰代名詞が現れることがある。

- 52) a. Han kände sig fram i den mörka källaren.
 he feel RM forward in the dark cellar.DEF
 〈彼は暗い地下室を手探りで進んだ。〉
- b. *Han kände fram i den mörka källaren.
 he feel forward. in the dark cellar.DEF

ここでは、移動をあらわす場合、どのような時に、擬似再帰代名詞が現れるかを考

察する。一般に下の例からもわかるように komma <come>, falla <fall> のような移動の方向を表す動詞や, gå <walk>, springa <run> のような移動の様態を表すような動詞は擬似再帰代名詞をとらない⁵⁾。

- 53) a. En person föll ner från 4:e våningen. (SO: 284)
 a person fell down from 4th floor. DEF <人が4階から落ちた。>
 b. *En person föll sig ner från 4:e våningen.
 a person fell RM down from 4th floor. DEF

- 54) a. Han sprang till bussen.
 he ran to bus.DEF <彼はバスまで走っていった。>
 b.* Han sprang sig till bussen.
 he ran RM to bus.DEF

一方、移動の手段を表す動詞には擬似再帰代名詞が現れるようである。いくつかのグループごとに見ていこう。

まずは、次に見られるように身体的な運動を手段として移動を引き起こすようなものがある。

- 55) a. armbåga / tränga / knuffa sig fram
 elbow / push / push RM forward
 <肘で押し分けて進む/割り込んで進む/押し分けて進む>
 b. Han knuffade sig fram genom folkmassan.
 he pushed RM forward through crowd.DEF
 <彼は群集の中を押し分けて進んだ。>
- 56) a. kämpa / slå sig fram
 fight / hit RM forward <戦いながら進む/殴りながら進む>
 b. De kämpade sig fram till seger.
 they fought RM forward to victory
 <彼らは戦って勝利へとたどりついた。>
- 57) a. känna / treva sig fram
 feel / grope RM forward <手探りで進む>
 b. Hon trevade sig fram i mörkret. (LO: 303)
 she groped RM forward in dark.DEF <彼女は暗闇の中を手探りで進んだ。>
- 58) a. hugga sig igenom / gräva sig ned
 cut RM through / dig RM down
 <切り開きながら進む/掘り下げていく>
 b. Han grävde sig ned i sanden.
 he dug RM down in sand.DEF <彼は砂を掘り下げていった。>

また次のように、目標にたどり着くまでの手段が、移動表現として現れる動詞にも擬似再帰代名詞が現れる。

- 59) a. leta sig fram
find RM forward 〈探しながら進む〉
b. Vi lyckades att leta oss fram till huset. (SO: 685)
we succeeded to findRM forward to house.DEF
〈我々はその家に探しながらたどりついた。〉
- 60) a. nosa / lukta sig fram
nose / smell RM forward 〈においを嗅ぎながら進む〉
b. Hon nosade sig till nyheterna i förväg.
she nosed RM to news.DEF in advance
〈彼女は先んじてそのニュースを嗅ぎつけた。〉

また次に見るように、身体動作ではない手段によって（抽象的な）移動を表現する場合にも擬似再帰代名詞が現れる。

- 61) a. bluffa / tiggla / låna sig fram
bluff / beg / borrow RM forward
〈賄賂を渡して/こびて/借りて切り抜ける〉
b. Han har bluffat sig fram under hela sin karriär. (SO: 124)
he has bluffed RM forward under whole his career
〈彼は自分の経歴を賄賂を渡してやりくりしてきた。〉
- 62) a. ljuga / skrika / skjuta sig fri
lie / shout / shoot RM free
〈嘘を言ってまぬがれる, 叫んで/銃を撃って逃れる〉
b. Hon ljög sig till en förmån.
she lied RM to an advantage 〈彼女は嘘を言って恩恵にありついた。〉
- 63) arbeta sig upp
work RM up 〈出世する〉

これらの構文は下に見られるような、英語の one's way 構文⁶⁾に相当するものと思われるが、⁷⁾ 英語の one's way 構文と本稿で議論しているスウェーデン語の移動構文の違いは、(64b) のような移動の付帯状況を、(65a, b) に見るように、表せないことである。スウェーデン語では、付帯状況は (65c) のように現在分詞で付加的に表さなければならない。

- 64) a. He pushed his way through the crowd.
〈彼は群集の中を押し分けながら進んだ。〉

b. He seemed to be whistling his way along. (Goldberg 1995: 209)

〈彼は口笛を吹きながら歩いているようだった。〉

65) a. *Hon visslade / sjöng sig hem.

she whistled / sang RM home

b. *Hon visslade / sjöng hem.

she whistled / sang home

c. Hon gick hem visslande / sjungande.

she walked home whistling / singing

〈彼は口笛を吹きながら / 歌いながら家へ歩いて帰った〉

以上の考察からわかることは、移動動詞（移動の方向を表す動詞と移動の様態を表す動詞）は擬似再帰代名詞を必要としないが、移動の手段を表す動詞は擬似再帰代名詞を必要とするということである。また、擬似再帰代名詞の現れる移動構文で、移動の付帯状況が表せないということは、この構文が因果関係を表す使役構文の一種であることを物語っているものと思われる。

3.3.3. 結果構文と移動構文における擬似再帰代名詞

以上、結果構文と移動構文における擬似再帰代名詞の出現について見てきたわけであるが、3.3.2.で見たように、擬似再帰代名詞の現れる移動構文が使役構文の一種であるとする、結果構文と移動構文を並行して扱うことが可能であると考えられる。状態変化という概念が、位置変化という、より具体的な空間概念を基にして理解されているということは、すでに認知言語学などで、広く理解されていることである。次の文も「眠る」という状態変化が *falla* 〈fall〉 という位置変化の概念で理解されている一例である。

66) Han föll i sömn.

he fell in sleep 〈彼は眠り込んだ。〉

また、構文レベルでも結果構文が使役移動構文に基づいているという分析がある (Goldberg 1995: 67-100)。本稿で見てきた結果構文と移動構文における擬似再帰代名詞の出現も結果構文と移動構文の並行性を示しているように思われる。

結果構文と移動構文における擬似再帰代名詞の出現は次のページの表1のようにまとめられる。

表 1

	結果構文	移動構文
S V XP	状態変化動詞	移動動詞 (移動の方向・移動の様態)
S V RM XP	変化の原因	移動の手段

(XP は結果述語を表す。但し結果述語が不変化詞のときは S V RM XP ではなく、S V XP RM になる。)

4. まとめ

以上、スウェーデン語の擬似再帰代名詞に関して見て来たわけであるが、最後に今後の課題を述べる。英語などにおける擬似再帰代名詞は、非対格性仮説との関連で議論されてきた。非対格性仮説とは、Perlmutter (1987) が唱えたもので、自動詞が均一のクラスではなく、非能格動詞 (unergative verb) と非対格動詞 (unaccusative verb) と呼ばれるものに大きく二分されるというものである。議論の詳細はここでは割愛するが、最も重要な点は、非能格動詞の単一の項が他動詞の主語と同じ振舞をするのに対し、非対格動詞の単一項が他動詞の目的語と同じような振舞を示すということである。非能格と非対格の動詞がその意味から予測できるかどうかは研究者によって分けられるところであるが、強い相関はあるようである。一般に非能格動詞は意志的、完了動詞であるのに対し、非対格動詞は無意志的、未完了動詞であるという傾向がある。

話を擬似再帰代名詞に戻すと、3.1. で見たように他動詞の結果構文では結果述語が主語ではなく目的語の結果状態を叙述するという「直接目的語制約」が働くことを見た。自動詞の結果構文を考えてみると、(67a) からわかるように、*dansa* <dance> では結果述語が主語を直接、叙述することができない。つまり他動詞の主語と同じ振舞をしており、非能格動詞であることがわかる。そこで (67b) のように、直接目的語の位置に擬似再帰代名詞を置くことで、主語の結果状態を示すことができる。

67) a. *Han dansade trött.

he danced tired

b. Han dansade sig trött.

he danced RM tired <彼は踊って疲れた。>

一方、(68) では、結果述語が主語の結果状態を (擬似再帰代名詞なしで) 叙述している。つまり *spricka* <crack> の単一項は他動詞の目的語と同じ振舞を示し、非対格述語であるということができる。

68) a. Stenen sprack i två nästan jämnstora delar.

stone.DEF cracked in two almost even-big parts

b.*Stenen sprack sig i två nästan jämnstora delar.

stone.DEF cracked RM in two almost even-big parts

〈その石は2つのほとんど同じ大きさに割れた。〉

但し、スウェーデン語の場合、3.3.2. で見たように移動構文でも擬似再帰代名詞が現れることを考えると話しはそう単純ではない。次の例を見てみよう。

69) a. Han sprang till bussen.

he ran to bus.DEF 〈彼はバスまで走っていった。〉

b.* Han sprang sig till bussen.

he ran RM to bus.DEF

70) a.* Han sprang trött.

he ran tired

b. Han sprang sig trött.

he ran RM tired 〈彼は走って疲れた。〉

(69) は移動構文で springa 〈run〉 が使われている例で、一方 (70) は結果構文で用いられる場合である。擬似再帰代名詞の現れ方をみると、springa 〈run〉 は結果構文では非対格自動詞であるが、移動構文では非能格自動詞であるということになってしまう。Levin & Rappaport Hovav (1995: 179-213) では、英語において run のような移動の様態を示す動詞に関して、今示したような分析がなされている。果たして、擬似再帰代名詞の有無が動詞の非対格性を示すテストとなるのかどうか、さらに、現代スウェーデン語から検証してみたい。

注

- (1) 本稿では、他言語の研究者にも理解できるように、言語学の論文の慣習に従い、例文に（あくまで便宜的にはあるが）英語の逐語訳（グロス）を付す。また、例文に付されている * の記号はその表現（あるいは文）が非文法的である事を、# の記号は語用論的に不整合であることを意味する。また逐語訳に使用している略号の意味は次の通りである。RM（再帰代名詞）、PASS（受動形態素）、DEF（（後置）定冠詞）。
- (2) 参考文献からの直接引用の場合は、筆者名および項を示す。但し、辞書等からの引用は、辞書名等を次のように略語で示す：LO = Allén, Sture (1995); SH = Johannisson, Ture. & K.G. Ljunggren (1966); SO = Allén, Sture (1996); SS = Hellstam, Dagmar (1992); TE = Bodegård, Anders (1985)。なお出典明記のない文は、筆者の作例による文で、インフォーマントにチェックしてもらったものである。
- (3) 英語の結果構文および擬似再帰代名詞に関しては、Simpson (1983), Levin & Rappaport Hovav (1995) を参照。
- (4) 現代スウェーデン語の擬似再帰代名詞に関しては、他に Teleman, Hellberg & Andersson (1999) の次の項で簡単な解説がある。Verbfraser: Allmänt § 8 注 1 (262), Verbfraser: Objekt § 7 c) (295), Verbfraser: Predikativ §38 (369), Verbfraser: Predikativ §38 では、この構文が使用頻度の増加とともに生産的になってきているという興味深い記述がある。
- (5) 移動の様態を表す動詞の中でも、次のような比較的特殊な移動の様態を表すものは、随意的に再帰代名詞を取る。
 - i) skynda (sig) ‘hurry’, slingra (sig) ‘wriggle’, smyga (sig) ‘creep’,
störta (sig) ‘rush’ (lit.throw RM), åla (sig) ‘crawl’, släpa (sig) ‘crawl’
 - ii) Han skyndade (sig) till bussen.
he hurried (RM) to bus.DEF 〈彼はバスへと急いだ。〉
- (6) 英語の one’s way 構文に関しては、Goldberg (1995), 影山・由本 (1997) を参照。
- (7) スウェーデン語－英語辞書、英語－スウェーデン語辞書でも、スウェーデン語の移動構文で擬似再帰代名詞が現れるような場合、英語の one’s way 構文が対訳として当てられている。

Om 'fake reflexive' i nusvenskan

Takayuki Tohno

Sammanfattning

Nusvenskan har ett speciellt slags reflexivfraser. Se på följande meningar:

- 1) a. Han arbetade sig trött.
- b. *Han arbetade sig

I (1a) konstrueras det intransitiva verbet 'arbeta' med det reflexiva objektet 'sig' samt objektspredikativet 'trött'. Det reflexiva pronomen vilket inte ingår i verbets valens kallas 'fake reflexive' pronomen. Syftet med denna artikel är att studera under vilka omständigheter det 'fake reflexive' pronomenet framträder samt är obligatoriskt.

Det 'fake reflexive' pronomenet uppträder i den resultativa konstruktionen (= (2)) samt i rörelsekonstruktionen (= (2)):

- 2) a. Publiken skrek sig hes.
- b. *Publiken skrek hes.
- 3) a. Han kände sig fram i den mörka källaren.
- b. *Han kände fram i den mörka källaren.

I de båda meningarna får subjekten tillstånds- och lägesförändring som predikats-fyllnaden 'hes' samt partikeln 'fram' anger. I den resultativa konstruktionen är 'fake reflexive' obligatoriskt om verbet självt inte anger tillståndsförändring som 'skrika' i (2). Likaså i rörelsekonstruktionen behövs reflexivpronomenet om verbet självt inte betecknar lägesförändring liksom 'känna' i (3). Det 'fake reflexive' pronomenet förekommer inte om de verb som betecknar förändring av tillstånd och plats används i den resultativa konstruktionen (= (4)) och rörelsekonstruktionen (= (5)) respektivt. Jämför (4) med (2) samt (5) med (3):

- 4) a. Stenen sprack i två nästan jämnstora delar.
- b. *Stenen sprack sig i två nästan jämnstora delar.
- 5) a. Han sprang till bussen.
- b. * Han sprang sig till bussen.

参 考 文 献

- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions : A Construction Grammar approach to argument structure*. Chicago, London: The University of Chicago Press.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論 — 言語と認知の接点 —』. 東京：くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子 1997. 『語形成と概念構造』. 東京：研究社出版.
- Levin, Beth. & Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantic interfaces*. Cambridge: MIT Press.
- Lindberg, Ebba. 1976. (1994.). *Beskrivande svensk grammatik*. 2: uppl. Edsbruk: Akademi tryck.
- Perlmutter, David. 1987. “Impersonal passives and the unaccusative hypothesis”, *Proceedings of the 4th Annual Meeting of the Berkley Linguistics Society*, 157-189. Berkeley: University of California, Berkeley.
- Simpson, Jane. 1983. “Resultatives”, Lori, Levin. *et al.* (eds.). *Papers in Lexical-Functional Grammar*, 145-57. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Teleman, Ulf, Staffan Hellberg. & Erik Andersson (red.). 1999. *Svenska Akademiens grammatik Band 3. Fraser*. Stockholm: Norstedts Ordbok.

辞 書 ・ 資 料

- Allén, Sture. 1995. *Lilla ordlista med bilduppslag*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Allén, Sture. 1996. *Stora svenska ordboken*. Stockholm: Norstedts.
- Bodegård, Anders. 1985. *Tänk Efter*. Stockholm: Skriptor Förlag.
- Hellstam, Dagmar. 1992 (1995). *Sverige på svenska*. 3: uppl. Lund: Kursverksamhetens förlag.
- Johannisson, Ture. & K.G. Ljunggren. 1966 (1984). *Svensk handordbok*. Stockholm: Esselte Studium.